

山大社会学同窓会報 第43号

2021（令和3）年7月20日発行

コロナ禍からみえてきた大学の本質

社会学コース 教授 横田 尚俊

時節柄、どうしてもコロナの話になってしまう。新型コロナウイルスによるパンデミックが襲来しておよそ1年半が過ぎた。執筆時点では、ワクチン接種が急速に進むとともに、1年遅れの東京オリンピック開催も間近に迫っているが、いまだに感染症が終息する見通しは立っていない。

例外なく、山口大学もこのコロナ禍に振り回されてきた。昨春、初回授業を通常通りに行った後で、大学執行部より、原則としてオンラインで実施せよとの指示が出た。初めての経験に悪戦苦闘しながらも、何とか全回やり終えたことを思い出す。3月頃までは「Zoom? 何それ?」という状態だったが、5月の連休明けには、私でも基本機能くらいは使いこなせるようになっていた。それ以降、会議でも学会の大会・研究会でも、今日に至るまで、ZoomやWebex（テレビ・web会議ツール）のお世話になりっぱなしである。

確かにこれらは便利なツールである。この機に乗じて、政府はデジタル化を積極的に推進すると宣言し、教育現場でも、オンライン方式でいくらかでも効果的な授業をすることができる、対面にこだわるのは時代遅れだ、との言説が流布するようになった。

ところが、オンラインで孤独な自宅学習を強いられた学生たちから、キャンパス内に足を踏み入れることもままならない現状に苛立つ声が、大波のように湧き上がったのである。なかには大学授業料返還を求めて訴訟を起こす者まで現れたことは、皆さんもご存じであろう。

山口大学では、昨年度前期の終盤から、感染防止策をとるという条件付きで、一部対面授業が解禁された。後期以降はその数も大幅に増え、人影の少なかったキャンパスにたちまち若々しい活気がよみがえっていった。今年度は、これまでのところほぼ全面的に対面授業が実施されている（オンラインとのハイブリッド形式も含む）。但し、学生たちの部活には一定の活動制限が加えられているし、何よりコース・研究室でのコンパや飲食をとまなう交流ができないまま今日に至っている。

コロナ禍が示しているのは、感染症が、大量かつ高密度の人口を擁した都市（あるいは都市的社会環境）を襲う「災害」であるという点だ。「刺激に乏しい田舎だ」と自嘲気味に語られることの多い山口県ではあるが、むしろそうであるがゆえに、感染防止に一定の注意をはらいさえすれば、大学を「平常」に戻すことも可能だったのである。

実際に、昨年度の「現代社会学調査実習」では、県内のこども食堂や高齢者サロン活動について、対面での聞き取り調査や参与観察を（むろん調査対象者の了解を得た上で）実施することができた。また、この春卒業した私のゼミ生たちも、その大半が対面での聞き取り調査によってデータを収集し、力作揃いの卒業論文を書き上げてくれた。

もう一つ、コロナ禍が明らかにしたのは、今さらながら、大学教育の意義は授業のみにあらずという点である。日本中の大学生から発せられた苦悩する声が、そのことを端的に示している。若き多感な時代に、同年代の仲間たちと出会い、さまざまな時をともに過ごし、お互いが切磋琢磨することによって、どれほど多くの充実感や成長の糧を得ることができるだろうか。大学に通った経験がある者なら、誰しも思い当たる節があるはずである。大学キャンパスは、そうした対面による出会いと人間的成長の場なのである。

むろん、コロナ禍において、社会のどのような対応が、いかなる言説が妥当であったのかを判断するには、この騒動の終息を待たねばならないだろう。私にとって、当面の最大の気掛かりは、社会学を専攻する現在の3・4年生たちと、これまで一度もコンパを開いていないことである。非都市的な山口といえども、これだけは依然として高いハードルなのである。果たして、彼ら、彼女たちと酒席をともに楽しむ機会は訪れるのか。コロナ禍が年度内に終息することを天に祈るばかりである。

新しい仕事

名誉教授 小谷 典子

2010年、山口大学を定年退職する際の最終講義には、各地から卒業生の皆様にご出席いただきありがとうございました。

退職後2年間、科学研究費補助金による「日本と台湾におけるボランティア活動の比較研究」を、「人文学部特別研究員」という身分を作っていただき続けました。この研究には、1995年卒業の林寛子さん（現山口大学アドミッションセンター准教授）や大学院東アジア研究科で博士の学位を取得した台湾の留学生たちにも参加していただきました。

2015年に、中国新聞社の「72回中国文化賞」をいただき、副賞の50万円を活かしてこの研究成果を形にしようと、三浦典子・林寛子編『日本と台湾におけるボランティアリズムとボランティア活動』（2016年）を溪水社より出版いたしました。

人文学部では、退職後も非常勤講師として「現代社会論」の講義を、毎週1コマ楽しく続けてきましたが、70歳を迎えた時にクビになりました。しかし、70歳を過ぎても、福岡県田川市にある福岡県立大学で、「企業の社会的責任(CSR)論」の講義を、夏休みに集中講義で行ってきました。

ところが昨年、持続可能な成長目標SDGsに関連づけて講義をする予定で講義資料は用意しておりましたが、新型コロナウイルスの感染が拡大し、オンラインで開講せざるをえなくなりました。4日間の連続講義はハードすぎるので、残念ながら講義を中止させていただき、これを機に、大学で講義することに終止符を打ちました。

というのは、一昨年、中国電力株式会社の知人から、「先生にお願いがある」と電話がきました。あいにく東京で開催された日本社会学会大会からの帰路、羽田空港で転倒して左上腕部を骨折しており、「人前に出るような仕事はできません」とお断りしましたが、そのお願いは、「社外取締役」に就任していただけないかとの相談でした。

人生何が起るかわかりません。私が大学を卒業する半世紀前には、民間企業の求人票の備考欄には、すべて「男子のみ」と記載されており、女子学生は民間企業から完全に排除されていましたが、近年、企業をとりまく環境変化のスピードは速くなっています。

退職後、放送大学山口学習センター客員教授、山口市地域づくり支援センター専門員、FM 山口番組審議会審査委員長等々、頼まれた仕事は、よほどのことがない限り引き受けてきましたし、長年、企業と地域社会のかかわりについて研究はしてきたものの、地域からみた企業の望ましい在り方は論じて、それが企業にとって実現可能であるかどうかを確認することはできていませんでした。

また、人社系の学問は役に立たないと言われるこの頃、「社会学」が役に立つことを証明することも自分の仕事であろうと考え、2020年6月に開催された中国電力の株主総会を経て、取締役監査等委員（非常勤）に就任し、新しい仕事が始まりました。

目下、卒業して50年目にやっと入社できた新入社員の気分で、会社法や電力事業など新たな学びに挑戦中です。

卒業から25年・変わる社会

1996（平成8）年卒 田村 朋久

1996年の卒業から、ちょうど25年となりました。「四半世紀」です。

卒業後、意識することはありませんでしたが、横田先生からの原稿執筆依頼に改めて時の流れを自覚したところでした。

この25年間、私は地元の民放テレビ局で働いています。「報道記者になりたい」と選んだ仕事でしたが、報道の現場で働いたのはそのうちの12年ほどです。営業や編成も経験しました。現在は報道内勤のデスクという仕事をしています。ニュースをまとめて構成したり、現場の原稿にケチをつけたりする、嫌われる仕事です（苦笑）。

25年の社会人生活。「社会」人ですから当然、「社会」と濃密に関わり続けています。

報道は、社会の動きを視聴者の皆様に伝えたいと思って活動しています。そもそもテレビ局自体がたくさんの人に見ていただくこと、つまり社会から（一定の）支持を受けていることが会社として存続する基盤になっています（近年のテレビのあり方にご批判があるのは重々承知しております…）。

社会学研究室では、様々な角度から「社会」を学びました。防府市での企業の社会貢献や周防大島町（当時は東和町でしたか）の高齢者へのインタビューなど、参加させていただいた調査は、今考えると記者の取材そのものだったようにも思えます。当時学んだことを真に私が理解できているかどうかは自信がありませんが、調査結果＝取材結果＝客観的事実から語らなければならないということは、この25年間、基本として持ち続けた（持ち続けたいと思っていた）つもりです。

その社会がこの1年あまりで大きく変わりました。親しく人と話すこと、外出して活動すること、おもしろそうなことを探して街をうろろすること。いつもしていたたくさんのことが推奨されない、禁じられる社会となりました。オリンピックが延期されるなんて、全世界がここまで大騒動になるなんて、去年の正月には想像すらできませんでした。湯田温泉からも足が遠のいています。去年の新入社員の、部署としての歓迎会も開けないまま、次の新入社員がやってきました。

社会が動きを止めると、ニュースの仕事もかなり止まってしまいます。山口県内の動きを対象にしている私たちにとってはネタ集めに苦労する状態が続いています。私たちの仕事は本当に「社会の動き」に支えられていたんだなと改めて感じています。

社会の見たくないところも見えるようになりました。「自粛警察」「県外ナンバー狩り」など、強烈な同調圧力は今も日本社会には強くあります。先の戦争に向かうときも、こんな社会の雰囲気があったのかなあ、などとも考えてしまいます。

この25年間で社会はずいぶんと変わりました。この1年で極端に変わったように、これからも今は想像できないような社会がきっとやってくるのでしょう。25年前に、先生方と、同期と賑やかに学んだ「社会の見方」を持ち続けていたいと強く感じています。

（付記）この場を借りて一言PRを。tys テレビ山口では「スクープ投稿」を随時募集しています。皆様の周りでユニークな出来事、話題などがありましたら、tys ホームページ「スクープ投稿」よりご投稿下さい。

榎野川沿いの満天の星空を想いながら

2000（平成12）年卒 越智 直子

皆様、お元気でいらっしゃいますでしょうか。私は、平成11年度に、社会情報論コース・頼瀬ゼミ（政治学）を卒業しました（当時は、政治学と民俗学とで学生研究室＝「政民研究室」をシェアしていました）。卒業の時に、先生からいただいた言葉は「闊達」。ゼミでは、常に出口に一番近い席に座り、サークルにアルバイト2つに、コースのコンパ係に、とにかく動き回っていて、学生の本分はさておき、忙しい学生だったなあという自覚があります。

在学中の社会全体のできごとでは、「冬季長野オリンピック」開催、ヒット曲にはSMAPの「夜空ノムコウ」などがあります。あの頃の未来には今、確かに立っていて、自分なりに充実した生活を送っていますが、新型コロナウイルス、東京オリンピック延期、ソーシャルディスタンス、ワクチン…。先の見えないこの状況はさすがに想像できませんでした。

私は卒業後、一般企業に就職して、人事・労務の仕事をしていました。仕事は面白く、人間関係にも恵

まれていたのですが、8年ほど経過したときに、「書類仕事・事務だけでなく、もう少し教育とか、生身のひとに近く、ひとにかかわる仕事がしたい」と、大学職員に転職して十余年が経ちます。

勤務先は中国地方の某大学で、現在の職場は、学生数約 700 名のキャンパスです。

職員歴は一貫して、「教学」と呼ばれる、教務、入試、学生支援、就職支援、学生相談といった、学生に係る部門の仕事をしています。先生方（教員）と連携しながら、保護者、高校生、高校教員、就職先企業、カウンセラー・アドバイザー、地域の皆さま・・・と学生生活に関わるあらゆる人と学生さんを結び、つないでいくなかで、一番大切だと感じていることは、ひとりひとりが主役である学生さんに「寄り添う」ことです。ちなみに、大学職員となって間もなく知ることになるのですが、自分の在学当時の広中平祐学長が、平成 12 年に出された報告書（通称「広中レポート」）にこのことが書かれています。学生支援に関わる者の基本書で、これも何かの御縁なのかなあとと思っています。

大学職員は、学生さんの人生に大きな影響を与えるような存在では決してありません。記憶にすら残らないでしょう。それでも、それぞれの学生さんの 4 年間で、少しでも彩りあるものになるように、そして、卒業して 10 年後、20 年後、「大学で学んでよかった」と、ふと思い出してもらえるようにと、仕事をしています。

もちろん私は、「山口大学に入学してよかった」「山口大学社会学研究室で学んでよかった」と思っています。全てが思うほどうまくはいかないみたいだ、そんなこともあります。大学時代の数々の思い出や経験、恩師・仲間が存在が日々のモチベーションになっています。

今はコロナ禍の闇に包まれています。『夜空ノムコウ』にはきっと朝が待っています。その暁には同窓生の皆さんと再会できることを期待しつつ、日々の職務に励みたいと思います。

たくさんの学びや人に出会えた 4 年間

2021（令和 3）年卒 河井 祐由希

この春、山口大学を卒業することとなりました。この 4 年間、大学に通わせてくれた両親、学業においてご指導くださった先生方、また、学校生活を共に過ごしてくれた友人たち、私の学生生活全てにおいて支えてくださった皆様に感謝を申し上げます。

大学受験を決めた時や入学時は、大学という場について、また大学に入って何をしたいのか、具体的なイメージが無くただ漠然とした思いでした。しかし人文学部の様々な分野の講義を受け、大学では今まで自分が経験したことや考えたことも無かったようなことを学ぶことができると分かり、毎日が新しい知識との出会いで、とても新鮮な日々を送ることができました。

私は元々歴史学を専攻するつもりでしたが、実際に授業を受けてみて自分の抱いていたイメージと違ったため断念しました。その頃新しく「障害者福祉」に興味を持ち始めたことをきっかけに、社会学専攻を視野に入れました。最初は進路を変えることに迷いがありましたが、先生に「世界が広がっているいろんなことに興味を持つのは当たり前のこと」だと言って頂き進路変更に至りました。このように、大学で様々な学問や知識と出会い、本当に自分の世界が広がり、大学は様々な学問に触れてみたいと思える場だと実感しました。

社会学コースでの学びで最も印象的だったのは、3 年次に受講した「現代社会学調査実習」での、福岡県糸島市への移住者を対象としたインタビュー調査です。事前準備として移住について学び、実際に学生二人一組で糸島市へ赴き移住者の方にインタビューを行い、最後に調査報告書を作成しました。インタビュイーの方と自ら連絡を取り合い、自分たちで聞きたいことを聞いていくという経験は初めてで、失敗と反省の繰り返しでしたが、それ以上にこの経験は自分たちの力として蓄えられたと思うし、とても大きな達成感を味わうことができました。そして、このように色々な人と関わり色々なことを知っていくことが、社会学という学問の魅力の一つなのだと感じました。

4 年次では「貧困の女性化」をテーマに卒業論文を執筆しました。実際にシングルマザーの方々にインタビュー調査を行い話を聞くことで、より一層この社会問題に真剣に向き合い、卒業論文に取り組むことができました。卒業論文の執筆は、この 4 年間で最も大変な作業で何度も心が折れそうになりましたが、速水先生や横田先生のアドバイスや常に共にいた友人たちのおかげで、最後まで取り組むことができました。特に速水先生にはたくさん助けて頂き、感謝してもきれません。辛いことが多かったですが、決してそれだけではなく、友人たちと励まし合いながら執筆に取り組んだ日々や、卒業論文を通して出会った人たちやそこから得た学び、何より最後までやり抜いたという経験は、私の大学生活において大切な思い出となり、そして確実に自分の自信に繋がりましたと感じます。

たくさんの人を支えられ守られてきた 4 年間の大学生活を終え、これから新たな生活が始まることへの期待と不安で胸がいっぱいです。これまで学んできたことや経験してきたことを武器に、新しいステージに踏み出していきます。

最後になりますが、この 4 年間お世話になった皆様に心から感謝申し上げます。未熟だった私を育ててくださり、そして最後まで支えてくださって本当にありがとうございました。これからの社会での活躍をどうぞ見守っててください。